

日本初の赤十字活動をした人 \*せきじゅうじ

高松凌雲 たかまつりょううん



高松凌雲は、一八三六年（天保七年）、筑後の国御原郡古飯村（今の小郡市古飯）の庄屋の三男として生まれました。凌雲の父は、「将来立派な人間になるには、若いうちから苦勞を知っておかねば。」と言って、凌雲たちに朝早くから道の掃除などをさせました。

凌雲は五さいから習字を習い、十三さいから畑仕事と勉強にはげみました。  
 （大人になったら人の役に立つ仕事をしたい。医者には人の命を救う大事な仕事だ。この仕事に自分の生涯をかけて、人の役に立ちたい。）  
 と心に決め、十六さいから酒やみその材料を売ってお金をため、勉強にはげみました。医者を目指して大阪へ旅立ったのは二十二さいのときでした。その後、江戸で名医の弟子となり、しっかり勉強して医者になりました。

三十さいのときには、当時日本の医者として最高位だった、徳川家の医者となり、翌年には江戸幕府の派遣団員として、パリの万国博覧会に出席し、ヨーロッパの国々を訪問しました。

\*赤十字活動 \*せきじゅうじ

戦争や災害、病気などで苦しむ人を救うための活動。現在、世界百八十六の国で活動が行われている。

\*庄屋 しょうや

江戸時代の村落の長。



\*戊辰戦争  
幕府軍と新政府軍との戦争。

\*将校  
軍を指揮する兵士。

パリの街にもどった凌雲は、貧しい人達を無料で治療する病院「ホテルヂュー」に行きました。そして、この病院の医師から

「地位や貧富に関係なく、全ての人を愛し、幸せを分かち合う。これがヨーロッパの考え方です。」

という話を聞きました。凌雲は、(本当の医学とは、こういうことなのだ。)と理解し、その病院で研究にはげみました。

日本で戊辰戦争が始まったため、凌雲は帰国し、傷ついた兵士の治療を始めました。そのとき、新政府軍が病院へやって来て、

「敵兵はみな殺した。」

と銃を構えました。凌雲は両手を広げて、

「お待ちなさい。早まっではいけません。」

と、大声で止めました。兵士が

「敵だ、敵の医者だ!」

とさげんだとき、凌雲は、

「わしらは負傷者を治す者で、君たちと戦いはしない。負傷者は何もできない。傷が治るまで助けてもらいたい。」

とうったえました。相手の将校の

「ただいまの申し出は承知した。病人や負傷者はどうぞ安心なされ。」  
という一声でやっと収まりました。



### \*医官

政府で働く、位の高い医者。

### \*日清戦争

一八九四年から一八九五年にかけて行われた日本と中国との間の戦争。

一年五か月にもおよぶ戦争が終わってからも、凌雲は、敵味方の区別なく、多くの傷ついた兵士の治療にあたりました。

明治維新後、新政府はこれまでの凌雲の活躍ぶりを見て、医官として政府のために働いてほしいとさそいました。しかし、凌雲は、「薬もなく、病院にも行けない人たちを見ると、自分だけが高い位に就くわけにはいかない。」  
と言って、政府のさそいを断りました。

一八七九年（明治十二年）、凌雲は同じ志を持った医師たちと共に、「同愛社」をつくり、貧しい暮らしのかん者の治療にあたることにしました。さらに「同愛社」では、日清戦争で夫や息子を失った家族の治療代を無料にしました。

しかし、こうした活動を広げていくうちに、薬代や社員の給料といった資金が足りなくなっていき、「同愛社」で働く人はどうとう半分にまで減ってしまいました。それでも凌雲は、

（私はこの活動をやめはしないぞ。たとえ一人になっても——。）  
と、活動を続けました。その活動は少しずつ認められ、一九〇〇年（明治三十三年）、凌雲は、東京医会の会長に選ばれました。

一九一〇年（明治四十三年）、東京を台風がおそい、大洪水で十八万戸の



家が水びたしになり、人々は苦しみました。この様子を見た凌雲は、「同愛社社員のみなさん、こういったときこそ貧しい人たちは我々を待っています。その人達を助けに行きましよう。」と呼びかけました。かん者の数は二万人以上にものぼり、「同愛社」は特別に十六か所のしんりょう所を設けて治療にあたりました。

その後、凌雲は、六十以上の施設をつくり、一九一六年（大正五年）、八十さいでなくなるまで、貧しい人達を助けるためにつくしました。たくさんの方の命を救った高松凌雲は、日本で最初の赤十字活動をした人として尊敬されています。

（作 富松聡／絵 イラストメーカーズ・池和子）

- 1 凌雲の生き方や考え方で、すばらしいなど思うのはどこどころだろう。
- 2 これまでに、心の美しい人の話を見たり聞いたりしたことがあるだろうか。